

萩原研二×松田陣平

ふゆの
保健室

ADULT ONLY



おいっ!

……
萩原



あぶなっ……!







しゃれた
包帯つけてんな





そうさ

はっ

俺ってそんな女子ばっかりのイメージ？



……好きな子ってつい見ちゃうじゃん

あ？

なんだそれ



……もう

陣平ちゃんのこと見たらこうなったのに

っ











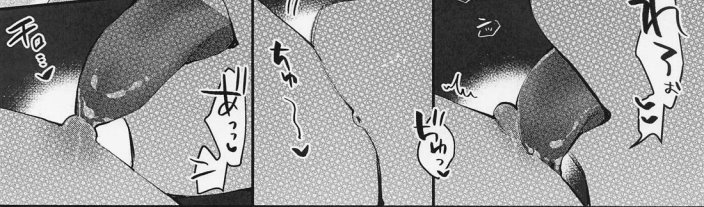


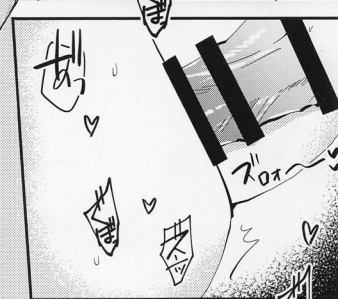


傷口ひらくぞ
これ以上は
先生も戻ってくるし











陣平ちゃん

我慢ね

すっ

なかオレの
待ってみたいに

吸いつくじゃん



はあ...

カワイイなもう

びりり

じりり

おまじっ

おまじっ
くっ...くっ...

ん？

本当に...

嫉妬してたのか？

へっ



いや…



本当だよ

笑う？



オレのこと
本当好きなのな

なんつうか



!



たくっ

んなっ

オレのスイッチ
いれるの

あっ

天才じゃん♡

ん!!!





陣平ちゃん
好きだよ



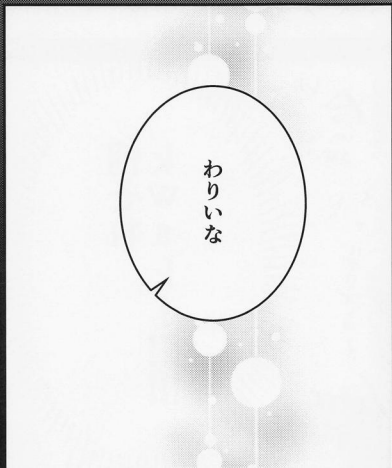
しってる

あのね…松田くん
聞きたいことあって

なに

萩原くんって
好きな子いるのかな？

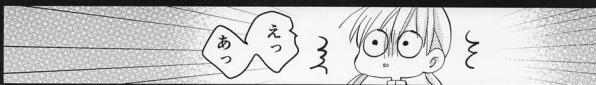
わりいな





ハギはオレのだから

諦めて



えっ
あっ

う

え



何それ
kws k...!!!

今の何...!!

ハギはオレの？

全が応援おる!!!

トキメキ...!!!
B...!!!
まっまっ...!!!
な...!!!
ハギ...!!!
ハギ...!!!

ゲスト
久城かいと 先生



to Kaito
Special
Thankyou ♡

「ちよっ、陣平ちゃん。陣平ちゃん？」

肩に担がれたままの状態で廊下を歩く松田の背中を、べしべしと叩く。

「せめて、要救助者を運ぶためのファイヤーマンスズキヤリーはやめてほしいなあ、なんて。ほら運び方だって、お姫様だっこ♡とか、もうちよつとさ、色っぽい抱き方があるじゃない。ねえ」

聞いてるのかと問う萩原の言葉などまるっとすべて無視して、真一文字に口を引き結んだまま、まずんと歩く。

しばらく歩いたのちに入ったのは、保健室。校医はでかけているらしくて、帰ってくる気配はない。乱暴な手付きで落とすように降ろされたのは、清潔なシーツがかけられた硬いベッドの上だった。

問髪入れず、萩原が逃げられないよう腹の上に乗りに上げる。

「陣平ちゃん……？」

不穏な空気に松田を見上げると、彼は無言のまま萩原のベルトに手をかけた。

「ちよっ、ちよつと、陣平ちゃん！ 積極的なのは大歓迎だけど無言はやめてー」

がちやがちやと乱暴にベルトを外してズボンの前をくつろげると、開いた隙間から手を差し込んで、まだ全く兆してもいないペニスをパンツ越しに挿んだ。

普段、自分からはアクションを起こそうとしない松田が積極的に手を動かしているのだ。反応しないわけがない。あつという間に元気に勃起したペニスをむんずとつかむと、いつの間にも準備をしたのか、ぬるりと生暖かい肉の感触に包まれた。

「……っ♡ 陣平、ちゃんっ♡」

不意打ちで予想していなかった感触に襲われる。気を抜いたら挿入しただけで射精しそうになって、思わず息を詰める。

「はっ♡ 相変わらず、大きい、な……っ♡」

どれだけ頼んでもやってくれなかつた騎乗位を松田がしてくるなんて初めてのこと。自分の腹の上で、跳ねるように積極的に腰を振る恋人の姿というのは思いのほか興奮だ。

「どうしたの。今日は積極的だね」

誰も居ない保健室に、じゅぶじゅぶと水音が響く。とはいえ松田が自分で動くのは慣れないため、快感を拾

うことはできていまひとつ決定打には欠ける。いまひとつ反応が鈍いことに松田が気づかないわけがない。

「文句でもあるのかよ？」

「まさか。光栄だよ♡ ——でも、俺も陣平ちゃんを気持ち良くしてあげたいな♡」

ぐるりと視界が回る。それまで腹の上から萩原を見下ろしていたというのに、一瞬にして彼を見上げる体勢になる。

「う、わっ！ —— ああっ♡」

体勢を入れ替えて、上下が反転する。膝の裏を持ち上げて、上から潰すようにペニスを突き入れた。狭い直腸内を押し広げるように、奥深い場所まで入り込んでくる。上からのしかられて、さらに熱い楔を打ち込まれれば逃げられない。

「う、ぐっ♡ くそっ、でけえんだよっ♡」

最奥よりもさらに奥、きゅうと閉じたそこを開けるとはかりに、トントンとノックする。

ガツチリと挿れられて逃げられない。

もつと奥、確実に自分のものにするという決意が、ナカを深く穿つ熱杭から感じる。ぶっくらりと張り詰めて膨れた先端で、口を閉じたままの奥へ迎え入れて欲しいと甘える。

「ねえ、陣平ちゃん♡ ここ開けて♡」

おねがい、と上目遣いに小首をかしげる萩原が、しつこくしつこくノックする。

「ぐうっ♡ だめ、だ♡ そんなされたら♡
ハギのチンコ欲しくて♡ 開いちまう♡♡」

ぐっと背中を丸めて腹に力が籠もる。奥に入りたくて虎視眈々と狙っている萩原のペニスを迎え入れるように、ぐっと口が緩んだ。

——ぐぶ♡ くぼっ♡

小さく開いた口を狙って、びたりと亀頭の先が触れる。求めているのは萩原だけではない。松田もまた、待っていたと言わんばかりにそこに吸い付いた。

「は、陣平ちゃん、わかる？ ここ♡ 奥でいっばい、結腸キス♡ してるよ♡」

「あ、きもち♡ くぼくぼしてる♡」

「ああ♡ ちゅつちゅつ陣平ちゃんもいつばい甘えて気持ちいい♡ かーわい♡」

両足が萩原の腰に絡みつく。逃さないよう種付けプレスするなら、それに応えるまで。

「そんなに締めないの♡ それじゃあ、あともう一踏ん張り♡ だっ♡」

負けじときゅうと締め上げる松田の足とナカに、萩原が嬉しそうに笑う。両腕も彼の背中に回して引き寄せて、全身を抱きつく。

——ぐ、ぶん♡

つるりとした亀頭が、結腸にはまり込む。狭い結腸口がペニスを啜えこんで、その衝撃にぐつと目を見開く。

「あっ、ぐっ♡ あああっ♡」

きつく狭い場所を無理に広げられて苦しそうに顔を歪めるが、どろりと落けた瞳は苦痛だけではなくて、むしろ快感を拾っている。

きゅうう、と締める収縮は絶妙な力加減で、

動いていないというのに搾り取られそうになる。すぐに射精しそうになるのをぐっと奥歯を噛んでこらえているのを知ってか知らずか、動かないことに焦れた松田がゆるゆると腰を揺らす。

「ああ♡ きもち♡ ハギのチンコ、熱いの奥にほし……♡」

狭い部分に亀頭を啜えこんだままはふはふと短く呼吸を繰り返すたび、ナカが収縮する。

「そんなに痛って♡ そこまで欲しいなら、たっぷりと味わってよ♡」

いきそうだと訴えている自分自身を見て見ぬふりをして、ガツガツと腰を振る。先程までとは違う強引な行為に、まぶたの裏にチカチカと火花が散ってスパークする。

「ぐっ♡ っ、はっ、ああっ♡」

「ははっすこっ♡ これは持ってかれそう♡」
眉をひそめた額から、つうと汗が流れる。ギ

ラギラと欲に濡れた深い紫に射すくめられて、ゾクリと腰に熱が広がる。

「はっ♡ イく♡ イく——っ♡♡」
「く——っ♡」

きゅんきゅんと直腸がきつく収縮する。松田の絶頂に引きずられて、萩原もまた、彼の最奥にあつさり熱を叩きつける。

「熱……いっ♡」

最奥を濡らす萩原の熱い精液にあえて、松田がびくびくと下腹を震わせる。熱を感じながら、ゾクゾクと湧き上がってくるモノを感じて、ぐうと口を塞ぐ。目を見開いて、いやいやと頭を振って、ぞわりと嫌な熱がこみ上げてくる自身のペニスを頭からきゅうと手のひらで握り込んだ。

ぶしゅ、と亀頭から透明の液体が噴射する。

握り込んだ指の隙間から何度も液体を飛ばした。指から力が抜けてもまだ、しよろしよろと勢いをなくした液体が漏れる。

「上手にたくさん潮吹きできたね♡」

「イイコイイコと頭をなでる萩原の手を感じながら、ぐちゃぐちゃに濡れたベッドの上で松田は疲労に目を閉じた。

最後まで読んでくださりありがとうございます!!!!!!

間に合ってた~~~~~!!!!!!



◆発行日◆

2022/08/21

◆発行者◆

ナミンC

◆Twitter◆

@c_naminc

◆pixiv◆

4404022

◆mail◆

naminnnc@yahoo.co.jp

◆印刷所◆

株式会社 ポプルス 様

感想などありましたら
こちら↑(めっちゃ喜びます)

日本製
組成 非公式成分 100%



△ 禁 止 事 項 △

- ・無断転載／複製／複写
(印刷・コピー・SNSへのアップロード等)
- ・一般公開／営利目的での転売
(インターネットオークション・フリマアプリ等)

●ご不要の際は



友人・知人間の譲渡、中古同人ショップ等への
持込はご自由にとらぞ
個別のお問合せにはお答えしかねます。ご了承ください。

